

比較言語学入門II

日 野 資 成

0. はじめに

前回の「比較言語学入門I」では、まず比較言語学に貢献した代表的な人々を紹介して比較言語学の歴史をたどり、さらに比較言語学の方法論とそれにもとづく世界の諸言語の分類を示した。また、最後に祖語再建の練習問題を取り上げ、それぞれについて詳しく解説した。

今回は、比較言語学入門その2として、言語の歴史的变化をたどる**歴史言語学** (Historical Linguistics) について解説する。

言語は時とともに変化する。言語が変化していることは、古い文献に現れる語と現代語を比べると明らかにわかる。たとえば中世英語の Beowulf に現れる

Gif he us geunnan wile, þat we hine swa godne gretan moton

If he us grant will that we him so generous greet should

「もし、われわれが寛大な彼を歓迎すべきである、と彼が認めるなら」

(Beowulf 346-347; cited in Bybee and Pagliuca 1987: 113)

において、gif や wile などは現代英語では if や will になっている。語順もここでは he us grant のように SOV であるが、現代英語では he grants us のように SVO になっている。

日本語でも、「伊勢物語」に何度も現れる、

むかし男ありけり。(昔男がいた)

という文において、「あり」(現代語の「ある」)という動詞が「(人が) いる」という意味で使われているが、現代語では「ある」はものの存在を表し、人の場合には「いる」が使われるようになっていく。「けり」という過去の助動詞もなくなり、現在は「た」によって過去が表されている。

歴史言語学は、言語変化を記述したり説明したりする学問であるが、言語の歴史的変化といっても、さまざまな変化の種類がある。まず、歴史的に変化するの音韻である。さきほどの中世英語の Beowulf の例で gif が if に変わるのもその例である。日本語にも「行かむ」が「行こう」になったり、「たり」が「た」になる例がある。この音韻変化のパターンについては第1節で解説する。次に、ことばの意味も歴史的に変化する。もともとは尊敬の二人称代名詞として使われていた「貴様」が、相手をけなすときに使われるようになったのがその一例である。意味の歴史的変化のパターンについては、具体から抽象に変化する抽象化を中心に第2節で検討する。さらに第3節では、ある言語共同体に起る語彙の変化について述べる。最後に第4節では文法の変化を、例を挙げて詳しく論ずる。

1. 音韻変化

音韻変化には、大きく分けて「**弱化**」(lenition)と「**強化**」(fortition)がある。「**弱化**」とは音韻がゼロに近づいてゆく現象を、「**強化**」とは音韻が増えてゆく現象をいう。よりエネルギーの少ない発音に向かう「**弱化**」の方が、「**強化**」よりも一般的である。以下ではまず1.1で「**弱化**」の例を、続いて1.2で「**強化**」の例を挙げる。また、「**弱化**」でも「**強化**」でもない「音韻交代」の例にも1.3で言及する。さらに、周りの音同士で影響しあう**同化**(assimilation)と**異化**(dissimilation)についても1.4, 1.5で解説し、1.6では音韻変化の漸次性の例としてドイツ語(1.6.1)と上代東国方言(1.6.2)を挙げ、最後に音韻変化の要因について1.7で述べる。

1.1 弱化

「**弱化**」は、音韻がゼロに近づいてゆく現象であり、具体的にはもともとあった子音や母音、音節が落ちたり(脱落)、二つの音韻が一つになる(融合)現象である。以下、子音の脱落、母音の脱落、音節の脱落、融合の順に述べる。

1.1.1 子音の脱落

a. 子音群の喪失(cluster reduction)

子音群の喪失は、子音群 (cluster) の中から一つの子音が落ちる現象をいう。たとえば、英語の district [dɪstrɪkt] の最後の [kt] という子音群のうちのアとの [t] が落ちて [dɪstrɪk] になる例がある。日本語では、青森方言などで「かえって」[kaette] が「かえて」[kaete] になる例がある。

b. アファレシス (aphaesis)

アファレシスは、語の最初の子音が脱落する現象で、たとえばアンカムチ語で [maʃi] (食べ物) が [aʃi] になる例がある。日本語では、神奈川県の方言で「何で」[nande] が「あんで」[ande] になる例がある。語頭でなく、語中の子音が脱落する場合もある。「月立ち」[tukitati] が「ついたち」[tuitati] になったり、歩いて [arukite] が歩いて [aruite] になるイ音便などである。

1.1.2 母音の脱落

a. アポコピー (apocope)

アポコピーは、語の最後の母音が脱落する現象で、たとえばバヌアツ語で [utu] (蚤) が [ut] になる例がある。日本語では、「です」「ます」の最後の母音 [u] が無声化する現象があるが、母音の脱落とはいえない。語の最初の母音が脱落する例としては「出だす」[idasu] が「出す」[dasu] になる例が挙げられる。

b. シンコピー (syncope)

シンコピーは、語の中の母音が脱落する現象で、たとえば英語で policeman [pəlɪsmən] (警官) が [plɪsmən] になる場合、[p] と [l] の間の [ə] が脱落している。日本語では「肌足」[padaasi] が「裸足」[hadasi] になる例がある。

1.1.3 音節の脱落

a. ハプロロジー (haplology)

ハプロロジーは、似たような音節が続く場合その一方の音節が脱落する現象で、たとえば英語で library [laɪbrəri] (図書館) が [laɪbrɪ] になる場合、音節 [rə] が脱落している。Mississippi が Mississippi になるのもその例である。日本語でも河原 [kawapara] が [kawara] になる例がある。

1.1.4 融合 (fusion)

「融合」とは、二つの異なる音韻が一つになる現象で、たとえばフランス語で [bɔn] が [bɔ̃] になる場合、もともとの [ɔ] と [n] が融合して [ɔ̃] となっている。日本語でも、高市 [takaiti] が [taketi] になるとき、ai が e に融合している。

1.1.5 語末子音の無声化 (final devoicing)

語末子音の無声化とは、語の最後の有声子音が無声化する現象で、たとえばドイツ語で [*ba:d] (風呂) が [ba:t] になる場合、語末の有声子音 [d] が無声子音 [t] に変化している。

1.2 強化

強化とは、語の中にもともとなかった音韻が加わる現象である。

1.2.1 エクスクレセンス (excrecence)

エクスクレセンスは、二つの子音の間にもう一つの子音に加わる現象で、たとえば英語で something [sʌmθɪŋ] (何か) が [sʌmpθɪŋ] になる場合、[m] と [θ] の間に [p] が加わっている。日本語にはこの現象はないが、似た現象として「観音」[kwan on] が [kannon] になる連声が挙げられる。ここでは、[on] の前に新たに、子音 [n] が加わっている。

1.2.2 エペンセシス (epenthesis)

エペンセシスは、二つの子音の間に母音に加わる現象で、たとえば英語で film [film] (フィルム) が [filəm] になる場合、[l] と [m] の間に [ə] が加わっている。日本語にはこの現象はないが、代わりに二つの母音の間に子音に加わる現象がある。「場合」[baai] が「ばやい」[bayai] になるなどである。これは、日本語の子音 (C) と母音 (V) からなる音節構造 (CV) を維持するためと考えられる。

1.2.3 プロセシス (prothesis)

プロセシスは、語の初めに新たに音韻が加わる現象で、たとえばモトウ語で [au] (私) が [lau] になる場合、[l] が新たに語頭に加わっている。

1.2.4 アンパッキング (unpacking)

アンパッキングは、融合の反対で、もともと一つの音韻が二つの音韻に分

かれる現象で、たとえばフランス語の [kamiõ] がビスマラ語で [kamioŋ] になる場合、[õ] が [o] と [ŋ] に分かれている。

1.2.5 母音分解 (vowel breaking)

母音分解は、母音の前や後ろに側音 (glide) が加わって二重母音 (diphthong) になる現象で、たとえば英語で bad [bæd] (悪い) が [bæid] になる場合、[æ] が [æi] に分解されている。

1.3 音韻交代

語中の子音や母音が他の子音や母音に交代する現象である。

1.3.1 子音交代

フィリピンの公用語であるタガログ語と、フィリピン諸島の一言語であるイロカノ語では、つぎのように t と s が入れ替わっている。

タガログ語	イロカノ語	意味
tanis	sa:ŋit	泣く
tubus	subut	敬愛する
tigis	si:git	(ぶどう酒などを) 他の器に移す
tamis	samqit	甘い

(Crowley 1992 : 46)

これをメタセシス (metathesis) という。日本語でも「茶釜」[tʃagama] が「ちゃまが」[tʃamaŋa] になったりする例がある。

1.3.2 母音交代

日本語で古語の「さぶし」[sabusi] が現代語の「さびしい」[sabisii] になるとき、[u] が [i] と交代している。

1.4 同化

同化とは、二つの音韻が互いに似たような音韻になる現象で、たとえばアイスランド語で [findan] (見つける) が [finna] になる場合、[d] が直前の [n] に影響されて [n] になっている。この同化は、前の音韻が後ろの音韻に影響を及ぼしているので**順行同化** (progressive assimilation) という。一方、英語で input [ɪnput] が [ɪmpʊt] になる場合、歯茎鼻音 [n] が直後の

両唇音 [p] に影響されて両唇鼻音 [m] になっている。この同化は、後ろの音韻が前の音韻に影響を及ぼしているので**逆行同化** (regressive assimilation) という。また、[findan] が [finna] になる場合の同化は、[d] が前の [n] と全く同じ音韻に変化しているので**完全同化** (total assimilation), [Inpʊt] が [Impʊt] になる場合の同化は、[n] が両唇という調音点のみ影響されて [m] になるので、**部分同化** (partial assimilation) という。

同化の一種に**口蓋化** (palatalization) がある。これは、口蓋音でない音(歯茎音, 軟口蓋音など) が口蓋音になる現象で、ふつう母音 [i] の前の子音が口蓋化する。たとえば日本語で [ti] が [tʃi] になる場合、[t] が [i] の前で口蓋化している。

1.5 異化

異化とは、同化の反対で、二つの音韻が互いにより異なる音韻に変化する現象で、たとえばアフリカーンズ語で [sxo:n] (きれいな) が [sko:n] になる場合、摩擦音 [s] の直後の摩擦音 [x] は、破裂音 [k] になり、直前の摩擦音 [s] とは異なる音韻に変化している。また、インド・ヨーロッパ祖語 [*bho:dha] (命ずる) からサンスクリット語の [bo:dha] への変化も [dh] に似ている [bh] が [b] になり、[dh] とはより異なる音韻になった。これを**グラスマンの法則** (Grassmann's Law) という。

1.6 音韻変化の漸次性

以上、例を挙げて代表的音韻変化を述べてきた。しかし、音韻変化はある日突然起るのでなく、少しずつ起るのである。ここでは、音韻の漸次的歴史的变化について述べる。

1.6.1 ドイツのレニシュファンの例

まずは、ドイツのレニシュファン (Rhenish Fan) における音韻変化の例を挙げよう。レニシュファンは低ドイツと高ドイツの中間に位置する場所であり、さらに三つに分けることができる。高低ドイツと三つのレニシュファンの五つの場所における [ik] (私), [maken] (する), [dorp] (村), [dat] (定冠詞) の現在の音韻を次に示す。

レニシュファン

低ドイツ	(a)	(b)	(c)	高ドイツ
ik	ich	ich	ich	ich
maken	maken	machen	machen	machen
dorp	dorp	dorp	dorf	dorf
dat	dat	dat	dat	das

低ドイツには、最も古い形式 [ik], [maken], [dorp], [dat] が残り、続いて (a) の地域では [ik] だけが [ich] に変わり、(b) の地域では [ik] と [maken] がそれぞれ [ich], [machen] に、(c) の地域では [ik], [maken], [dorp] がそれぞれ [ich], [machen], [dorf] に変化し、最後に高ドイツは4つの単語すべての音韻が変化している。このことから、音韻は低ドイツから高ドイツへと徐々に変化していることがわかる。

1.6.2 上代東国方言の例

次にわが国の上代東国方言の例を挙げよう。上代の東国方言は万葉集の巻14の東歌と巻20の防人歌に現れる。その中で特に注目に値するのは動詞連体形（「降ろ雪」など）と形容詞連体形（「うつくしけ人」など）である。この「降ろ」や「うつくしけ」などは、従来東国の訛形として扱われてきたが、北条（1966）はこれらが中央語（奈良）の「降る」「うつくしき」の古形ではないかという仮説を立てた。

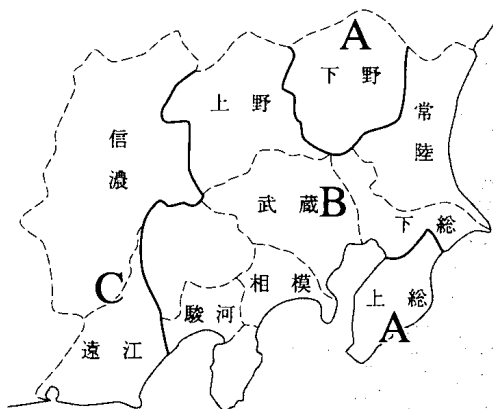
東国方言による和歌には、その詞書から東国のどこで作られたか特定できる歌が少なからずある。したがって、それぞれの国ごとに、それらの歌の中に現れる東国の動詞連体形（ $-o_1$ ）と中央語の動詞連体形（ $-u$ ）の分布、東国の形容詞連体形（ $-e_1$ ）と中央語の形容詞連体形（ $-i_1$ ）の分布を調べることができる。次の表1はその分布を示したものである（ o_1 , e_1 は甲類・乙類のうちの甲類の母音を表す）。

表1 東国方言 国ごとの $o_1 \cdot u$ と $e_1 \cdot i_1$ の数

国/語尾	$-o_1$	$-u$	$-e_1$	$-i_1$	$-o_1/-e_1$	$-u/-i_1$
A 下野	2	0	2	0	4	0
上総	1	0	0	0	1	0
B 上野	3	3	1	1	4	4
武蔵	1	2	2	3	3	5
下総	1	1	1	1	2	2
常陸	1	6	3	3	4	9
相模	2	3	0	0	2	3
駿河	0	2	1	2	1	4
C 信濃	0	4	0	0	0	4
遠江	0	2	0	1	0	3
合計	11	23	10	11	21	34

この結果から東国を、 $-o_1 \cdot -e_1$ のみが起る地域 A (下野, 上総), $o_1 \cdot -e_1$ と $u \cdot i_1$ が起る地域 B (上野・武蔵・下総・常陸・相模・駿河), $u \cdot -i_1$ のみが起る地域 C (信濃・遠江) の三つに分けることができる。次の地図に、この三つの地域を示す。

地図 東国の三つの地域



中央の奈良では $u \cdot -i_1$ 語尾のみが起っている。中央から最も近い地域 C でも $u \cdot -i_1$ 語尾のみが起り、中央から最も遠い地域 A では $-o_1 \cdot -e_1$ 語尾のみが起り、その中間の地域 B では $-o_1 \cdot -e_1$ 語尾と $-u \cdot -i_1$ 語尾の両方が起っている。この分布によって次のようなことが考えられる。

まず $-o_1 \cdot -e_1$ 語尾が中央に起り、中央から次第に東に広まりすでに東国の東のはてまで広がっていた。次に $-u \cdot -i_1$ 語尾が中央に起り、中央から次第に東

に広まっていき、それは地域Cにまで達していた。地域Bにも達しつつあったが、地域Aには達していなかった。

このように、東国地方の o_1 語尾と u 語尾の分布、 e_1 語尾と i_1 語尾の分布は、 o_1 から u への母音変化、 e_1 から i_1 への母音変化が中央の奈良から次第に東に広まっていったことを示している。

1.7 音韻変化の要因

まず1.1では弱化を、1.2では強化を述べたが、弱化の方が強化よりも一般的音韻変化である。これは、弱い音韻の方がより少ないエネルギーで済むという**経済性** (economy) の法則にもとづいている。さらに1.3では同化を1.4では異化を述べたが、同化のほうが異化よりも一般的音韻変化である。これは、発音のしやすさによるものと思われる。

また音韻変化には、純粋な音韻論的要因でなく、社会的要因によるものもある。たとえば、Labov (1963) は Martha's Vineyard において /ay/ と /aw/ の発音が [ae] と [ao] に近くなるのが31才から45才までの人に多いというデータを示した。これは、この年齢層の人が猟師として外から来る人と貿易していたからだとして Labov は説明する。つまり、この発音は、彼らが外から来る人と区別するバッジのようなものだったのである。

現代日本語でも、サーファー (HLLL) がサーファー (LHHH) になるような**アクセントの平板化**は、若い世代の人によく起る。これも無意識的に他の世代と区別するという社会的要因によるものであろう。

1.8 音韻変化のまとめ

さまざまな音韻変化について、まず世界の諸言語の例を、続いて日本語の例を挙げて示した。主な例を以下にまとめて示す。

項目	世界の諸言語	日本語
子音群の喪失	district > distric (英語)	kaette > kaete
語頭子音脱落	[maʃi] > [aʃi] (アンカムチ語)	nande > ande
融合	[bɔn] > [bɔ̃] (フランス語)	takaiti > taketi
メタセシス	tubus (タガログ語) > subut (イロカノ語)	[tʃajama] > [tʃamaɲa]

さらに、1.6の音韻変化の漸次性では、地理的に連続した地域における漸次的音韻変化について、ドイツのレニシュファンにおける低ドイツから高ドイツへの変化、上代の東国地方における中央の奈良から東への変化の二つの例を挙げた。このように、同じ種類の音韻変化は世界の多くの言語で起っていると言える。

2. 意味変化

語の意味の歴史的変化は、音韻の歴史的変化ほど体系的にはまだ整理されていない未開拓の研究分野である。ここではまず、Bloomfieldによる9つのパターンを2.1で紹介し、次に意味変化が漸次的に起る例を2.2で示し、さらにHeine, Claudi, and Hünemeyerの抽象化の理論を2.3で紹介する。

2.1 Bloomfield (1933: 426-427) による分類

Bloomfieldは以下の9つの意味変化のパターンを提示している。

2.1.1 狭化 (narrowing)

たとえば、古代英語の *mete* は「食べ物一般」を指したが、現代英語の *meat* は「豚の肉」を指すようになった。豚の肉は食べ物の中の一つであり、意味が狭くなったといえる。Meillet (1912) はフランス語の *saoul* の歴史を挙げている。*saoul* はもともと一般的に何かによって「とらえられた、支配された」という意味であったが、人の心を支配する代表的なものは酒であることから「酒の力によって支配された、酔っ払った」という意味になった。これも「一般的なもの」から「酒」という意味の狭まりを示している。日本語の「やま」「川」「花」がそれぞれ「比叡山」「鴨川」「桜」を指すようになるのも、一般から特殊への狭化を示している。

2.1.2 広化 (widening)

狭化の反対の変化で、たとえば中世英語の *bridde* は「巣立ち前のひな」を指していたが、現代英語の *bird* は「鳥一般」を指すようになった。特別の鳥から鳥一般へと意味が広がったといえる。Arlotto (1972: 177) は現代英語の *salary* (給料) の例を挙げている。*salary* はラテン語の *salārium* (兵士に与

えられる塩, sal は「塩」の意) にまでさかのぼり, それが「兵士に与えられる給料」という意味を経て, 「給料一般」を指すようになった。これも狭い意味が次第に広がる広化を示している。日本語の「酒菜 (さかな)」はもともと酒を飲むとき添えて食べるもの(肴) という意味であったが, 現在は「魚一般」を指しても使われる。これも特殊から一般への広化の例である。

2.1.3 比喩 (metaphor)

具体的な意味から抽象的な意味への変化で, たとえばゲルマン祖語*bitraz は「刺すような」という形容詞であったが, 現代英語の bitter は「苦しい, つらい」という意味に変化している。「刺すような」とは物理的な痛さを表すが, 「苦しい, つらい」は心理的な痛さを表す。物理的に痛い箇所は目に見えるのに対し, 心理的に痛い箇所は目に見えないので, 具体から抽象への変化といえる。日本語の「つかむ」なども物理的に「物をつかむ」から心理的に「人の心をつかむ」に変化する。

2.1.4 換喩 (metonymy)

同じ語でもその指すものが置き換わる意味変化を換喩という。たとえば古代英語の *ceace* は「あご」を指していたが, 現代英語の *cheek* は「ほお」を指すようになった。「あご」と「ほお」では指す場所が少しずれている。Anttila (1972:142) は, 発明家の名前が発明されたものを指すようになる例として, *ampère* (アンペア, 電流の単位), *watt* (ワット, 電気の明るさの単位), *sandwich* (サンドイッチ) などを, はじめに生産された場所が生産物を表すようになる例として *champagne* (シャンペン), *china* (陶器) などを挙げている。これらはみな, 指すものが固有名詞や地名からものに置き換わった換喩の例である。日本語の「瀬戸物」も生産された場所から来ている。

2.1.5 シネクドキ (synecdoche)

シネクドキは換喩の一種で, 全体が部分を指すようになったり部分が全体を指すようになる変化である。部分が全体を指す例としては, ゲルマン祖語の **tu:naz* (町の周りを囲む「垣根」) から現代英語の *town* (「町」) への変化が挙げられる。「町の周りを囲む垣根」は「町」の部分なので, これは部分から全体への変化である。他にも, *blade* (刀の刃) が *sword* (刀) を指したり, *rhyme* (押韻) が *poetry* (詩) を指したりするのがこの変化である。

(Dictionary of English Linguistics: 911)。日本語では「車」が「車輪」から「自動車」を指すようになった例がある。

逆に全体が部分を指す例として、marble (大理石) が statue (大理石でできた像) を指したり、vessel (入れ物) が ship (船, 人を入れて海に浮かぶ入れ物) を指すようになるものがある (Dictionary of English Linguistics: 911)。日本語では、晴れ・曇り・雨などの全体を指す「天気」が「今日はいい天気だ」のように「晴れ」だけを指すようになる例がある。

2.1.6 ハイパーバリ (hyperbole)

ハイパーバリは、もともとの強い意味が何度も使ううちに弱くなっていく意味変化で、たとえば前フランス語の *extonāre* (雷が鳴る) が現代英語で *astonish* (驚かす) になった。Crowley (1992: 151) は、英語の相手を傷つけるような強い意味をもつ *buggered up* (だめになった) がトークピジンに借用語として入った *bagarap* が単に「(車などが) うまく機能しない」の意味になった例を挙げている。日本語でも「出血大サービス」「超特価」「激安」などの商業用語は、聞き慣れて、もはやそれほど強い意味に感じられない。これもハイパーバリの例である。

2.1.7 リトテス (litotes)

リトテスはハイパーバリの反対で、もともとの弱い意味が強くなる変化で、たとえば前フランス語の *kwalljan* (苦しめる) が古代英語の *cwellan* (殺す) になった。日本語の「消す」ももともとの「(火などを) 消す」の意味から「邪魔者は消せ」のように「殺す」の意味としても使われるようになる。

2.1.8 悪化 (degeneration)

悪化は、悪い意味への変化で、たとえば古代英語の *cnafa* (少年) が *knave* (ごろつき) になった。日本語でも「貴様」「お前」などは、人を敬う二人称代名詞から、人をさげすむ語に変化している。

2.1.9 良化 (elevation)

良化は悪化の反対で、よい意味への変化である。たとえば、古代英語の *chiht* (男の子, 召使) が現代英語では *knight* (騎士) になっている。

2.2 意味の漸次的変化

以上、さまざまな意味変化のパターンを紹介した。これらの意味変化は突然起るのでなく、徐々に起る。つまり、Aが突然Bになるのではなく、中間的A Bの段階を経てそうなるのである。いくつか例を挙げる。

古代英語の *clugge* は「鐘」を指していた。中世英語では *clugge* から変化した *klok* は「鐘」に加えて「時計」も指すようになった。「鐘」が時間を告げる役割をしていたからである。現代英語では *clugge* は *clock* になったが、*clock* は「時計」のみを指す。この変化をまとめると次のようになる。

	古代英語	中世英語	現代英語
形式	<i>clugge</i>	<i>klok</i>	<i>clock</i>
意味	鐘	鐘・時計	時計
パターン	A	A・B	B

古代英語の *gebed* は「祈り」を指していた。中世英語では *bede* は「祈り」に加えて「ロザリオ（祈りの数を数えるビーズ）」も指した。ローマカトリック教会では祈りの数をロザリオで数えていたからである。現代英語の *bead* は「ビーズ」のみを指す。この変化も次にまとめる。

	古代英語	中世英語	現代英語
形式	<i>gebed</i>	<i>bede</i>	<i>bead</i>
意味	祈り	祈り・ロザリオ	ビーズ
パターン	A	A・B	B

(Arlotto 1972 : 170-172)

ラテン語の *penna* は「鳥の羽根」を指していた。中世英語では *pen* は「鳥の羽根」にほかに「ペン」も指した。鳥の羽根で字を書いたからである。現代英語の *pen* は「ペン」のみを指す。以下にこの変化を示す。

	ラテン語	中世英語	現代英語
形式	<i>penna</i>	<i>pen</i>	<i>pen</i>
意味	羽根	羽根・ペン	ペン
パターン	A	A・B	B

マラヨ・ポリネシア祖語の **liang* は「洞穴」を指していたが、やがて「洞穴」のほかに「墓穴」も指すようになった。洞穴が墓に使われたからである。

現代では liang は「墓穴」のみを指す。

以上、意味変化は突然でなく徐々に起ることを「 $A > A \cdot B > B$ 」というパターンを使って述べてきた。ここで興味深いのは、意味変化が起るきっかけである。「鐘」が「時計」に変化したのは、鐘が時間を告げるのに使われたからであり、「祈り」が「ビーズ」に変化したのは、「ロザリオビーズ」が祈りを数えるのに使われたからであり、「羽根」が「ペン」に変化したのは、羽根がペンとして使われたからであり、最後に「洞穴」が「墓穴」に変化したのは、洞穴が墓穴として使われたからである。このような変化は予測がつかない。意味変化は多分に偶然の要素を含んでいるといえる。

2.3 Heine, Claudi, and Hünemeyer の抽象化の理論

Heine たち (1991: 161) は、意味範疇間の抽象度の順位付けを次のように提示した。

もの > 空間 > 時間 > 質

具体的-----抽象的

「もの」「空間」「時間」「質」は意味範疇を表す。「空間」は「もの」よりも抽象的、「時間」は「空間」よりも抽象的、そして「質」は「時間」よりも抽象的、つまり左が一番具体的、右で右へいけばいくほど抽象的になる。

ハイネたちは、アフリカのガーナとトーゴで話されている、ニジェールコンゴ語族のクワ語派に属するエウェ語から共時的証拠を提示している。エウェ語の megbé という語は「背中」（「人」という意味範疇に属する）、「(ものの) 背」（「もの」という意味範疇に属する）、「うしろ」（「空間」）、「後で」（「時間」）, そして「知恵遅れの」（「質」）という意味がある。

(a) é-pé megbé fá 人／もの

3 単-所有 背中 つめたい

「彼の背中がつめたい」

(b) e kpɔ xɔ-á pé megbé nyúíé má a? もの

2 単 見る 家-定冠 所有 うしろ すてきな あの 疑問

「あの、すてきな家のうしろ（の壁）が見えますか」

(c) é le xɔ á megbé 空間

3単 である 家 定冠 うしろ

「彼は家のうしろにいる」

(d) é kú le é-megbé 時間

3単 死ぬ である 3単-あと

「彼は彼のあとに死んだ」

(e) é tsí megbé 質

3単 とどまる うしろ

「彼は知恵遅れた」

(エウェ語, Heine たち1991年161, 163ページ)

日本語の意味が歴史的に具体から抽象に変化する例として「あと」を挙げる。

(a) 我が背子が あと (跡) 踏み求め 追ひ行かば (万葉-4-545) もの

(b) 我也行く方あれど, あとにつきてうかがひけり。

(源氏-未摘-180-109, 110) 空間

(c) 横雲の晴れゆくあとのあけぼのに (隆信-国歌大観1249) 時間

(d) 人夫等はいらへも得せで, かたみにおもてをあはしつつ, あとすさり
して立もあがらず (椿説弓張月-第36回-22-3, 4) 質

(日野2001年13ページ)

「あと」は万葉集 (759年) では「足跡」(「もの」に属する) という意味であったが, 源氏物語 (11世紀初め) では「うしろ」(「空間」に属する) の意味になり, 隆信集 (1205年) では「あと」(「時間」に属する) に, さらに「椿説弓張月」(年) では「消極的態度」(「質」に属する) を指すようになった。

2.4 意味変化のまとめ

意味変化においても, 世界の諸言語と日本語の例を示してきた。以下にその主なものをもう一度挙げる。

項目	世界の諸言語	日本語
狭化	mete(食べ物) > meat(豚肉) (英語)	川 (川一般) > 鴨川
広化	bridle (ひな) > bird (鳥) (英語)	肴 (酒のつまみ) > 魚
換喩	China (中国) > china (陶器)	瀬戸 > 瀬戸物

シネクドキ

部分 > 全体 *tunaz(ゲルマン祖語, 垣) > town(町) 車 (車輪) > 自動車

全体 > 部分 marble (大理石) > statue (像) 天気 > 晴れ

悪化 cnafa (少年) > knave (ごろつき) 貴様(尊敬) > きさま(さげすみ)

さらに、2.3 では意味が具体から抽象に変化することを、エウエ語と日本語の例を挙げて示した。このように、同じ意味変化のパターンが世界の諸言語で起っていると言える。

3. 語彙変化

語彙の歴史的変変化も、突然ではなく、徐々に起こるものである。この節では、借用語による語彙変化を 3.1 で、明治初期の翻訳漢語による漢語語彙の増加を 3.2 で、最後に**語彙の広まり** (lexical diffusion) を 3.3 で述べる。

3.1 借用語による語彙変化

ある言語共同体の言語の語彙は、借用語を取り入れることによって大きく変化する。たとえば、イギリスがノルマン人に征服されたとき、英語に大量のフランス語が流入した。現在の英語に残っているフランス語起源の語のほとんどは、このとき流入した。次にそのいくつかをジャンル別に挙げる (Jespersen 1938より)。

政治関係の語

authority (権威), chancellor (首相), council (議会), country (国), crown (王位), minister (大臣), nation (国民), parliament (国会), state (州), people (人民), power (権力), realm (領地), reign (統治する), sovereign (君主)

封建制度関係の語

baron (男爵), baroness (男爵夫人), duchess (公爵夫人), duke (公爵), feudal (封建制), liege (君主), marquis (侯爵), peer (貴族), prince (王子), vassal (家臣), viscount (子爵)

教会関係の語

altar (祭壇), angel (天使), baptism (洗礼), clergy (牧師), deacon (執事), lord (主), prayer (祈り), religion (宗教), sacrifice (犠牲), saint (聖人), savior (救い主), service (奉仕), testimony (証), trinity (三位一体), virgin (聖母マリア)

軍事関係の語

admiral (海軍将官), arms (武器), armour (よろい), army (軍隊), battle (戦闘), buckler (盾), lieutenant (大尉), navy (海軍), peace (平和), sergeant (軍曹), soldier (兵士), troops (騎兵隊), war (戦争)

法律関係の語

accuse (告発する), attorney (弁護士), court (法廷), crime (罪), defendant (被告), justice (司法), judge (判事), jury (陪審員), plaintiff (原告), plea (抗弁), plead (弁護), sue (告訴する), suit (訴訟), summon (召喚する)

フランス料理関係の語

boil (煮る), dainty (ご馳走), dinner (晚餐), feast (祝宴), fry (炒める), jelly (ゼリー), pastry (パイ, タルト), pasty (肉入りパイ), roast (あぶる), sauce (ソース), sausage (ソーセージ), soup (スープ), supper (夕食), toast (トースト)

これらの語は英語がフランス語から借りた「借用語」である。あるものがある言語共同体に流入するとき、そのものがその言語共同体にない場合、そのものを指す語も必要になる。それが借用語である。ふつう、文化的な語が借用語となる。文化はそれぞれの言語共同体で異なるからである。一方、借用語になりにくいのは「基礎語彙」である。体の部分の名称(頭, 口, 鼻, 耳など), 自然現象ならびに自然(雨, 風, 雲, 川, 山, 海など), 基本的動

作を表す語（「歩く」, 「走る」など）、基本的状態を表す語（「ある」, 「いる」など）が基礎語彙であるが、これらはほぼ、どの言語共同体にも存在する。したがって借用の必要がないのである。

3.2 明治初期の漢語の増加

日本語における語彙の大きな変化として、明治初期に増えた翻訳漢語の例を挙げよう。宮島（1967）は、現代雑誌90種の語彙調査における頻度の高い1000語について、『万葉集』（8世紀前半頃）『源氏物語』（11世紀初め頃）、『日葡辞書』（1603年）、『和英語林集成』（1867年）、『新訳和英辞典』（1909年）、『新和英辞典』（1931年）を対象として、遡ることのできる各時期の語種の比率を次の表2まとめている。

表2 代語彙高頻度上位1000語の語種別出現数

	万葉集	源氏物語	日葡辞書	和英語林	新訳和英	新和英	全体
和語	326 100.0	420 94.2	515 78.7	562 73.9	567 59.6	580 58.5	584
漢語	0 0	23 5.2	134 20.5	190 25.0	368 38.7	382 38.5	383
外来語	0 0	0 0	0 0	1 0.1	3 0.3	16 1.6	17
混種語	0 0	3 0.7	5 0.8	8 1.1	13 1.4	14 1.4	16

この表から、漢語語彙は明治以後急激に増加していることがわかる。これは、明治初期に西欧語を翻訳する必要に迫られてできたものである。明治維新後、外国文化の吸収が急速に行われたが、外国語の書籍の場合、一般の人々は原書で読むことが難しかったため翻訳書が必要であった。その際にできたのが、膨大な量の翻訳漢語である。翻訳漢語をその方法によって分類すると次のようになる（森岡（1959）による）。

①江戸時代にあることばで置きかえる。

例 people 町人, public 御用, servant 家来, society 連中, 社中

②「漢籍」から、すでに廃語となった過去のことばを復活させる。

例 deduction 演繹, absolute 絶対, apriori 先天, ethics 倫理学

③過去にあった語を変形する。

例 honor ソンキョウ 尊敬, a male child ナンシ 男子
a girl ニョシ 女子

④中国で作られた訳語の借用。

例 absolute 自主, arithmetic 数学, cabinet 内閣, cube root 立方根
director 監督, discourse 理論, electricity 電気
United States 合衆国

⑤日本人自身による造語

例 神経, 引力, 地球, 衛星, 重力, 圧力, 速力, 分子, 物理学, 化学,
哲学, 美学, 工学, 文部省, 陸軍省, 郵便, 風船, 扇形, 近眼, 「一
的」「一式」「一
哲学関係 哲学, 心理学, 現象, 客観, 主観, 観念, 帰納, 演繹(西
周による)
演説, 汽車, 版權, 討論 (福沢諭吉による)
郵便, 為替, 切手 (前島密による)

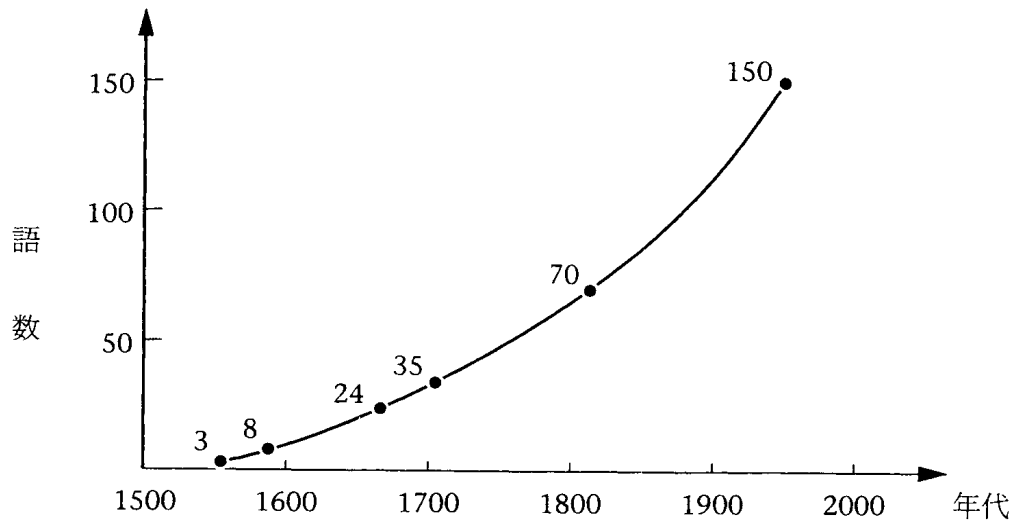
このように、多くの翻訳家の努力によって現在われわれが使っている漢語
ができたわけである。

3.3 語彙の広まり

はじめはごくわずかの語においてのみ変化したが、次第に他の語にまで広
がってゆくという言語変化がしばしば見られる。これを語彙の広まりという。

たとえば英語におけるアクセントシフトが挙げられる。rebel は、はじめは
名詞、動詞ともに後ろにアクセントがあったが(rebél), 16世紀半ば過ぎ頃か
ら名詞として使われる場合は第一音節にアクセントを持って発音されるよう
になった(rébel)。名詞と動詞がアクセントによって区別できるようになっ
たのである。はじめはこの rebel に加えて outlaw と record の3語のみにしか
この変化は起らなかったが、次第に他の語にも広まっていった。次の表1は、
その変化が時代とともに広まっていった様子を示している (O'Grady et al.
1996: 321)。

図1 英語のアクセントシフト



英語において名詞にアクセントシフトがあった具体例を年代ごとに示す (ibid.)。

16世紀以前	16世紀	18世紀	現代
rebél	rébel	rébel	rébel
affíx	affíx	áffix	áffix
recéss	recéss	recéss	récess
mistáke	mistáke	mistáke	mistáke

この *mistáke* や *repórt*, *suppórt* など、約千もの語は、名詞であっても後ろにアクセントがある。これらの語のいくつかも、将来は、名詞の場合アクセントが第一音節に移る可能性がある。したがって、この変化は現在でも続いているといえる。

3.4 語彙変化のまとめ

3.3 で述べたように語彙変化は通常次第に起ると言われている。しかし、ある言語共同体における語彙は、ある特定の時期に急激に変化することがある。3.1 で挙げたフランス語の英語への流入、3.2 で挙げた明治維新後の漢語の増大がその例である。これらに共通しているのは、どちらも政治と無関係でないということである。フランス語の英語への流入は、ノルマン人のイギリス征服時に起り、明治初期の漢語の増大も、明治政府による西欧文化

を取り込もうとする政策によってもたらされたものである。

4. 文法変化

語彙だけでなく、文法も歴史的に変化することがある。4.1で英語の語順変化を、4.2で英語の形態素の変化を、4.3では、類型による世界の言語の変化を、最後に4.4と4.5では日本語の動詞と形容詞の活用の種類の変化を述べる。

4.1 英語の語順の変化

前置詞 of と名詞で所属を表す英語の用法はフランス語からの借用である。たとえば、the tail of the cat (猫のしっぽ) はフランス語の la queue du chat (猫のしっぽ) から来ている (The Linguistic Encyclopedia 1991: 209)。

また、英語の attorney general (司法長官) や court martial (軍事裁判) などのように形容詞が名詞のあとに来る語順もフランス語からの借用である (Arlotto 1972: 193)。

さらに、もともとは主語 (Subject) - 動詞 (Verb) - 目的語 (Object) (以下、SVO と略す) の語順だったモツ語 (オーストロネシア語族に属する) が SOV の語順になった。これはコイタ語 (オーストロネシア語族ではない) からの借用である (Crowley 1992: 143-144)。

中世英語 (Middle English) においても OV から VO への変化があった。古代英語 (Old English) においては、従属節を含まない文の語順は SVO であった。

S	V		O	
Hē	geseah	þone	mann	
彼は	見た	冠詞	男	
「彼は男の人を見た」				

しかし、目的語が代名詞である場合、SOV となった。

S O V
 Hēo hine lārde
 彼女は 彼に 助言した
 「彼女は彼に助言した」

目的語が従属節に現れる場合、代名詞でなくても SOV の語順となった。

S O V
 þa hē þone cyning sōhte, hē bēotode
 ーのとき 彼は 冠詞 王様 訪ねた 彼は 自慢した
 「王様を訪ねたとき、彼は自慢した」

次の表 2 は、中世英語における語順の型 (OV か VO か) の割合を示したものである (O'Grady et al. 1996 : 312)。

	1000	1200	1300	1400	1500
OV	53%	53%	40%	14%	2%
VO	47%	47%	60%	86%	98%

殊に1300年から1400年にかけて、OV から VO の変化が顕著に起っているのがわかる。

4.2 英語の形態素の変化

Autos (自動車) や Hotels (ホテル) のようなドイツ語の複数語尾形態素 -s は、英語からの借用によってできたものである (Dictionary of Linguistics 1988 : 67)。また、英語の criteia (criterion (基準) の複数形), alumni (alumnus (男子同窓生) の複数形), alumnae (alumna (女子同窓生) の複数形) の複数形語尾 -a, -i, -ae はラテン語からの借用によって新たにできたものである (Hock 1991 : 387)。

4.3 類型による世界の言語の変化 (Crowley 1992 : 135-140より)

世界の言語は類型的に以下の三つに分けられる。

- 孤立語** 一語が一つの形態素からなる。
- 膠着語** 一語が複数の形態素からなる場合もあるが、その境界線ははっきりしている。

屈折語 一語が複数の形態素からなり、その境界線がはっきりしない。
孤立語の例として、パプア・ニューギニアで話されているヒリ・モツ語が挙げられる。

Laegu sinana gwarume ta ia hoia Koki dekenai
私の 母 魚 一つの 彼女は 買った コキ で
「私の母はコキで魚を買った」

上の例で、それぞれの単語はそれぞれ一つの意味を持っている。

膠着語の例として、オーストラリアのニューウェールズで話されているバンジャラン語が挙げられる。

Mali-ju bajgal-u mala da:dam buma-ni-a:ŋ
冠詞-主格 男-主格 冠詞-目的格 子供-目的格 打つ-過去-強く
「その男はその子を強く打った」

屈折語の例として、ラテン語が挙げられる。

Markellus amat Sofiam
マルカス 愛する ソフィアを
「マルカスはソフィアを愛している」

孤立語は、音韻減少によって膠着語になる。たとえばメラネシアピジンでは log (「で」) や blog (「の」) といった前置詞が音韻減少によって次に来る名詞にくっつくようになる。

aus blog mi → aus blo-mi

家 の 私

「私の家」

log aus → l-aus

で 家

「家で」

次に膠着語は、形態素の融合によって屈折語になる。たとえばバヌアツで話されているパーム語では一人称主語の na-と未来時制の i-が融合して ni になっている。

*na-i-lesi-∅ → ni-lesi-∅

私-未来-見る-それを 私+未来-見る-それを

最後に屈折語は、形態素減少によって孤立語になる。ラテン語からイタリア語への変化を見てみよう。

ラテン語

Markell-us amat Sofia-m

マルカス-主格 愛する ソフィア-目的格

「マルカスはソフィアを愛している」

イタリア語

Marcello ama Sofia

マルカス 愛する ソフィア

「マルカスはソフィアを愛している」

ラテン語の主格形態素-us や目的格形態素-m はイタリア語ではもはやなくなり、イタリア語は、一語が一つだけの形態素からなる孤立語となった。ラテン語では主格、目的格を表す形態素が名詞に膠着しているため、語順を変えても意味は変わらない。

Sofiam amat Markellus

「マルカスはソフィアを愛している」

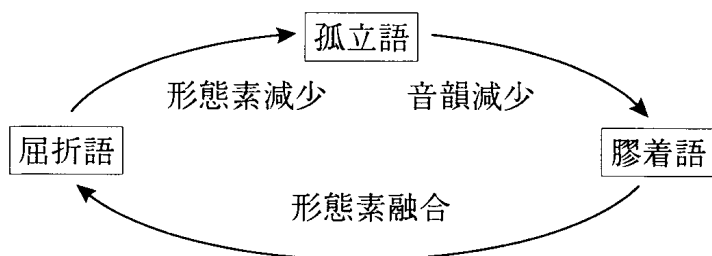
一方イタリア語では、語順を変えると意味も変わる。

Sofia amat Marcello

「ソフィアはマルカスを愛している」

以上の類型の変化をまとめて図式化してみよう。

図2 世界の言語の類型的変化



4.4 日本語の動詞の活用の種類の変化

奈良時代には動詞の活用の種類は9種類あった。現代語では5種類に減っている。その変化を以下にたどってみよう（沖森1989：84）。

表3 動詞の活用の種類の変化

奈良	平安	鎌倉・室町	江戸	現代
四段(読む)			四段	> 五段
上一段(見る)				> 上一段
上二段(落つ)		上二段	上一段	> 上一段
		下一段(蹴る)	四段	> 五段
下二段(告ぐ)			下一段	> 下一段
カ変(来)				> カ変
サ変(す)				> サ変
ナ変(死ぬ)		ナ変	四段	> 五段
ラ変(あり)		ラ変	四段	> 五段

これらの変化のうち江戸時代の四段から現代の五段への変化は、たとえば「書かむ」が「書こう」に音韻変化した結果で、本質的な変化ではない。一方、二つの大きな傾向は、四段（五段）動詞に近づいていく傾向と、一段動詞に近づいていく傾向である。四段化の傾向として、下一段だった「蹴る」と、ナ変・ラ変だった「死ぬ」「あり」が江戸時代に四段になっている。一段化の傾向として、上二段だった「落つ」などと下二段だった「受く」などが、江戸時代にそれぞれ上一段，下一段になっている。この四段化・一段化の傾向は、より一般的な形に近づこうとする類推の傾向を示すものである。

一段化の具体例として「落つ」を挙げてみよう（活用語尾のみを挙げる）。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
奈良時代	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
①室町時代	ち	ち	つる	つる	つれ	ちよ
②江戸時代	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ

このようにまず、①室町時代に連体形による終止法が確立し、続いて②江戸時代に終止形「つる」が「ちる」に一段化し、現代の上一段活用ができたのである。この上一段化は、上二段活用よりもより一般的な、「見る」のような上一段活用動詞への類推としてできたものである。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
見る	み	み	みる	みる	みれ	みよ

4.5 日本語の形容詞の活用の種類の変化

奈良時代の形容詞にはク活用とシク活用の二種類があった。

①奈良時代	形容詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形
	ク活用	高し	高	く	く	し	き
	シク活用	美し	美	しく	しく	し	しき

シク活用の「美し」も語幹を「美し」までにして「く・く・し・き・けれ」と活用させたいところだが、そうすると終止形が「美しし」になってしまうので、仕方なく語幹を「美」にしてシク活用を設けたわけである。室町時代になると、動詞と同じく形容詞にも、連体形による終止法が確立し、シク活用の「美し」は終止形・連体形ともに「美しき」となる。

②室町時代	形容詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形
		美し	美	しく	しく	しき	しき
						しけれ	

この結果、「し」を語幹に持ってきてても終止形に「き」が残るようになる。

形容詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形
美し	美し	く	く	き	き	けれ

これは、次の室町時代のク活用の「高し」と同じ活用である。

形容詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形
高し	高	く	く	き	き	けれ

このようにしてすべての形容詞はク活用のみになり、ク活用・シク活用の区別がなくなった。江戸時代には、終止形・連体形の活用語尾「き」はイ音便化して「い」になり、現代の活用になった。

③江戸時代	形容詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形
		美し	美し	く	く	い	い
							けれ

4.6 文法変化のまとめ

文法変化について、英語における語順変化・形態素変化、類型による世界の言語の変化と、日本語における動詞と形容詞の活用の変化を述べてきた。SOV から SVO への語順変化、複数形語尾などの借用による変化は、他言語などの影響による比較的大きな文法変化と言える。日本語は、このような文法変化を受けたことはない。これは、日本が島国であり、他国との交渉が比

較的少なかったからであろう。4.4, 4.5で取り上げた動詞・形容詞の活用の変化も、日本語内部の変化であり、他の言語の影響によるものではない。

5. おわりに

以上、言語変化を音韻・意味・語彙・文法という四つの項目に分けて、まず世界の諸言語の例を、続いて日本語の例を挙げて論じてきた。

第1節では、同じ種類の音韻変化が、世界の諸言語で起っていることを論じた。殊に、ドイツのレニシュファンにおける低ドイツから高ドイツへの音韻変化と、上代の東国地方における中央の奈良から東への音韻変化の二つの例を比較し、地理的に連続した地域における漸次的音韻変化という点での共通性を示した。第2節では、同じ意味変化のパターンが世界の諸言語で起っていることを示した。殊に、エウェ語の *megebé* (背中) と日本語の「あと」(足跡)の例を挙げて、意味が具体から抽象に変化することを示した。さらに第3節では、ある言語共同体における語彙が、急激に増大する例を中世の英語と明治初期の日本語で示した。第4節の文法変化については、日本語は世界の諸言語ほど大きな変化を被ってはいないことを述べた。

文法変化については、日本語は他の言語に現れるような変化を受けていないが、音韻変化・意味変化・語彙変化においては、日本語は他の言語と似たようなパターンの変化をしている。

本稿では、日本語を含めた世界の諸言語に共通の変化を詳述することによって、汎言語的記述の可能性の一端を提示することができた。しかしながら、取り上げた言語は世界の言語のごく一部に過ぎない。今後は、もっと多くの言語における変化の歴史を辿って行きたいと思っている。

参考文献

- Anttila, Raimo. 1972. *An Introduction to Historical and Comparative Linguistics*. New York: Macmillan Publishing Company.
- Arlotto, Anthony. 1972. *Introduction to Historical Linguistics*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- Bybee, Joan L., and William Pagliuca. 1987. The evolution of future meaning. In Ramat et al., eds., 108-122.
- Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. New York: Henry Holt and Company.
- Crowley, Terry. 1992. *An Introduction to Historical Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hünemeyer. 1991. From Cognition to Grammar – Evidence from African Languages. In Elizabeth C. Traugott and Bernd Heine eds., vol 1: 149-187.
- Hock, Hans Henrich. 1991. *Principles of Historical Linguistics*. New York: Mouton de Gruiter.
- Jespersen, Otto. 1938. *Growth and structure of the English Language*. New York: Doubleday Anchor Books.
- Labov, William. 1963. The social motivation of a sound change. *Word* 19 : 273-309. Reprinted as chapter 1 of Labov (1972) : 1-42.
1972. *Sociolinguistic patterns*. University of Pennsylvania Press.
- O'Grady, William, Michael Dobrovolsky, and Mark Aronoff eds. 1996. *Contemporary Linguistics*. New York: St. Martin's Press.
- Ramat, Anna Giacalone, Onofrio Carruba, and Giuliano Bernini, eds. 1987. *Papers from the 7th International Conference on Historical Linguistics*. Amsterdam: Benjamins.
- Traugott, Elizabeth C. and Bernd Heine eds. 1991. *Approaches to Grammaticalization*. Amsterdam: Benjamins, 2 vols.
- 沖森卓也 『日本語史』1989年 おうふう
- 日野資成 『形式語の研究』2001年 九州大学出版会
- 北条忠雄 『上代東国方言の研究』1966年 日本学術振興会
- 宮島達夫 「現代語の形成」『ことばの研究第3集』（国立国語研究所論集3）1973年 秀英出版
- 森岡健二 「訳語の方法」『言語生活』1959年12月号
- 『現代英語学辞典』1973年 成美堂
- The Linguistic Encyclopedia. 1991. New York: Routledge.